発表④

「外国語教育における翻訳―TILTの意義と役割について」

A. DELGERMAA
モンゴル高専

「外国語教育における翻訳
ーTILTの意義と役割についてー」

A.デルゲルマー准教授（博士）
モンゴル工業高等専門学校

1

はじめに

- 本発表では「通訳翻訳」と「外国語教育」いう研究分野の歴史的研究パラダイムを概観することでTILT研究の外国語教育における意義と役割を位置づける。
- モンゴルにおける日本語教育や日モ語研究の重要な課題の一つとしてTILT研究進展の重要さを取り上げて、若干の提言をしたい。

2

通訳翻訳研究の歴史的研究パラダイム

- **50年代は「実務の時代」**
- 世界大戦後の政治経済分野における通訳翻訳のニーズの高まりを反映し、主として実務的関心を軸に議論が展開。
- **60年代は「言語学の時代」**
- 言語学の理論的展開に伴い、言語学的な観点からの「等価性」を巡る議論が盛んになり、基本的にこの問題を中心に議論が展開。
- **70-80年代は「同時通訳のプロセス解明を目標とした認知的・心理学的な取り組みの時代」**
- 通訳翻訳の認知的な側面への関心が高まり、通訳に関してはとくに同時通訳のプロセス解明を目標とした心理学的な研究が増え、翻訳に関しては機能主義的アプローチとテキスト言語学的取り組みが増えた。

3

通訳翻訳研究の歴史的研究パラダイム

- **90年代から現在に至るまでが "Social/Cultural Turn"の時代。**
- 90年代になると、通訳翻訳を単なる言語や認知の問題ではなく、通訳翻訳者とこれをとりまく社会・文化的状況との交互作用の結果と捉える立場が台頭。このシフトを "Social/Cultural Turn" と呼ぶ。
- **2000年代以降「TILT の時代」**
- 2001 年 の CEFR (Common European Framework of References for Languages: Learning, Teaching and Assessment）による言語能力の再定義により、**TILT** すなわち外国語教育における翻訳 (Translation in Language Teaching)」の位置づけが再評価される（通例、TILT では翻訳は通訳を含む概念として扱う）。

4

外国語教育学の歴史的パラダイム

- 一方、これまでの外国語教育学の歴史的パラダイムを概括すれば、次の通りとなる。
- **1880年代：古典的な文法訳読方式の時代**
- **1880年代～1940年代：直説法の時代**
- **1940～1980年代：オーディオリンガル方式の時代**
- **1980年代以降：コミュニカティブ・アプローチ（CA）の時代**
- **2000年代以降：基本的にCAの流れを継続しながら、タスクに基づく教授法（Task-based Language Teaching, TBLT）や、言語形式への焦点化（Focus on Form, FonF）を取り入れた教授法が提案され、現在に至る。**

5

日本の大学における外国語教育の近年の動き（英語、フランス語、中国語教育を中心）

- Cook（2010）、染谷（2010）、染谷・川原・山本（2013）によってCAの前提となる母語排除の思想と単一言語主義(monolingualism) の限界が指摘され、学習者の母語を外国語学習のための有効なリソースとして再評価する動きが特に欧州を中心に強まっている。
- これを決定的な流れとしたものが CEFR (2001) による言語能力の再定義である。

6

CEFR (2001) による言語能力の再定義

- **CEFR (2001)** では、コミュニケーションのための言語活動を、従来の「聞く」「話す」「読む」「書く」という伝統的な枠組みに代わって次の 4 つに分類した上で、こうした言語活動を行うために必要とされる能力について詳述している。
- **受容 (Reception)** : 読んだり聞いたりする受動的な能力
- **産出 (Production)** : 書いたり話したり、プレゼンしたりする能動的な能力
- **相互作用 (Interaction):** 人との会話に参加したり交渉したりする力（相手に適切に反応しながらコミュニケーションの場を自ら作っていく力）
- **仲介** (Mediation):（主として異言語・異文化間の）コミュニケーションを仲介する能力（翻訳・通訳、要約、書き換え [言い換え] などの能力）

7

言語能力の再定義の要因

コミュニカティブアプローチ(CA)の功罪	CAの理念は"Fluency first"を基本とし、コアになる部分をネイテイブスピーカーが担当するか、あるいは授業は常に直接法で行われる。
	「母語」の運用力に影響を与える。
	BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) から CALP(Cognitive/Academic Language Proficiency) への移行が困難（Cummins 1980, 1991a, 1991b）

8

共通基底言語能力
(Common Underlying Proficiency)

9

L1とL2の深層レベルにおける関係

10

タイトルを入力

BICS言語能力の養成
- 挨拶や買い物、道を尋ねるなど特定の場面でのタスクをこなすために必要な言語能力習得

CALP言語能力の養成
- 表層的な言語知識や反応形成の問題ではなく、より高度な知的活動への移行であり、深い認知的処理が必要とされる

11

CA

受容 (Reception)：読んだり聞いたりする受動的な能力

産出 (Production)：書いたり話したり、プレゼンしたりする能動的な能力

相互作用 (Interaction): 人との会話に参加したり交渉したりする力（相手に適切に反応しながらコミュニケーションの場を自ら作っていく力）

TILT

仲介 (Mediation):（主として異言語・異文化間の）コミュニケーションを仲介する能力（翻訳・通訳、要約、書き換え [言い換え] などの能力）

12

日本の大学における外国語教育の目標設定・課題

ことばへの意識
BICS言語能力習得
（直接法、会話・ゲーム中心の教授法）

異文化への意識
CALPへの移行困難
（CAでは、母語の使用が制限されるため学習者の既得認知能力の養成が軽視される）

自己実現能力
"CA+1"の言語教育
言語習得からメタ言語能力の養成へ
（外国語での理解を母語で再構成させること、母語を外国語を鏡として客体化すること）

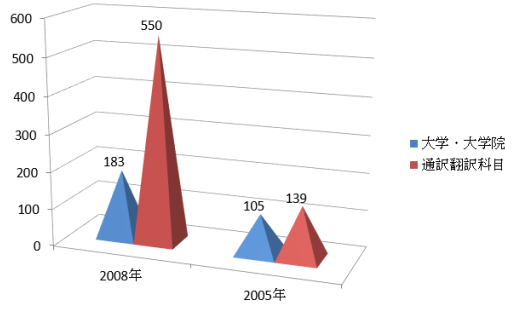
13

日本語の大学における通訳翻訳教育の位置づけ

- 外国語教育の成功
- 本質的なメタ言語能力の養成
- 通訳翻訳を取り入れた「授業モデル」、TILTへの関心の高まり、適切な教材開発

14

日本通訳翻訳学会の調査データ（2008年）
（英語、フランス語、中国語教育を中心）



15

TILT (Translation in Language Teaching)の研究対象・課題

- 仲介 (Mediation):（主として異言語・異文化間の）コミュニケーションを仲介する能力（翻訳・通訳、要約、書き換え [言い換え] などの能力）
- 言語習得に必要とされる認知スキルを習得するのには言語コントロールというスキルの習得が最も重要である。

16

言語コントロールスキルの四技能との関連性

四技能
（聞く、話す、読む、書く）の習得

「気付き→自発的な操作→
コントロール→自動化」プロセス

完璧な言語システム＋言語コントロール力→言語の健全な使用

17

通訳翻訳による言語コントロールスキル・認知ツールとしての観点

- 全ての技能を必要とする統合的な活動
- 実際の言語使用状況に最も近い活動
- 二つの言語を比較対照するための認知的ツール
- 学習者は様々な困難を様々な方法で乗り越える力を統合的に与える手法
- 学習者の言語に対する気付きを高め、一つの頭の中に二つの言語体系を構築する手助けをする他それらの操作を導くコンテクストを提供する。

18

通訳翻訳による言語コントロールスキル・認知ツールとしての観点

- テキストに埋め込まれた文化的・言語的な情報の理解を提供する。
- 学習者の学習意欲を動機付け、さらに言語に関する自信を与える。
- よって、翻訳は外国語習得において欠かせない認知的ツールとなるため、TILTの研究進展が外国語教育の支えとなる。

19

関西大学のTILT研究

（実践授業調査の結果、染谷泰正（2010年））

ST → Text-base Model → Tentative Translation → Situation Model → Final Translation (FT)

20

神田外国語大学のTILT研究

（学士号レベルを対象、2010年）

- セクション1：通訳翻訳課程への取り組み
- セクション2：授業関連について
- セクション3：学習環境について
- セクション4：留学について
- 結果：通訳翻訳は教授法を支える
- 通訳翻訳課程教育プログラムの改善点とその取り組み措置の確定

21

大東文化大学のTILT研究

（修士号レベルを対象、2010年）

- 調査研究の質問票
- Q.1.通訳翻訳課程（修士号）修了年度、現在の仕事内容、入学前の最終学歴
- Q.2.入学時点での状況（TOEIC、TOEFL、英検などのスコア、留学あるいは海外での生活経験、通訳翻訳の実務経験、民間通訳スクールの通学歴）
- Q.3.修了後の最初の仕事と仕事を取れるまでのタイムラグ
- Q.4.大東文化大学のプログラムについての所見

22

大東文化大学のTILT研究
（修士号レベルを対象、2010年）

- 調査研究の結果：
- 対象者A.学士課程修了後プロの通訳者となった修了生
- 対象者B.プロの通訳者になっていない修了生
- A.全員が修士課程修了後言語能力や通訳翻訳技法の向上ができている。なお、研究方法も身に付けている。

23

大東文化大学のTILT研究
（修士号レベルを対象、2010年）

- B.全員がそれぞれ大きな活躍を見せている。
- 多国籍企業のマネジャー、通訳エジェンシーの統括部長、会社員（観光関連、製造等）、英語教育者、大学職員等が現在の仕事である。
- この結果はTILTの重要さを指している。
- ポイントはプロの通訳者になっていなくても、**ある程度の語学力を見に付けたから、その能力を活かせる職業に付いていること。**

24

モンゴルにおける日本語教育
TILT研究の余地

- 日本語教育が1975年に導入され、現時点で日本語教育を行っている高等教育機関は22校、小等教育機関が31校、外国語センターが23校となっている。
- 大学・大学院における日本語学習者数は2,402名で、うち580名が日本語を専攻科目として学び、1,822名の学習者が選択科目として履修している（2015年）。
- TILT研究はまだ行われていないため、今後進展が必要とされる。

25

終わりに

- 現在のモンゴルにおける日本語教授法は必ずしも現在の外国語教育学や第二言語習得論の水準に見合ったレベルにあるとは言えず、TILT の理念に基づく教育も行われていない。
- 一方、日本ではおよそ183校（550科目）の大学・大学院で翻訳に関連した授業が開設されており（水野・長沼他2008）、関西大学をはじめとしていくつかの大学でTILTの理念に基づく先駆的な外国語教育の試みが開始されている。
- したがって、日本における TILTの現状とその課題を調査し、その成果をモンゴルにおける日本語教育に応用する方策をさぐることは、モ日両国の外国語教育の改善・進展に多大な貢献をするものと期待される。

26

ご清聴、ありがとうございました。

27

参考文献

- 1.アシガイ　デルゲルマー（2013）.「翻訳単位としての慣用句」（――等価性を中心として――）.関西大学英語学会　第35回例会「研究としての通訳翻訳」.
- 2.近藤正臣（2010）「大東文化大学大学院の通訳プログラム」（――その理念、プログラム・デザイン、実践――）『通訳翻訳研究』日本通訳翻訳学会誌．第10号219-229項.
- 3.柴原智之（2010）「大学学士レベルにおける通訳翻訳課程」（――アンケート・インタビュー調査による神田外国語大学生の認知分析――））『通訳翻訳研究』日本通訳翻訳学会誌．第10号243-257項.
- 4.染谷泰正（2013）.「通訳研究の現状と課題」関西大学英語学会　第35回例会「研究としての通訳翻訳」.
- 5.豊創省子（2013）.「英語教育における翻訳をめぐる最近の研究動向」関西大学英語学会　第35回例会「研究としての通訳翻訳」.
- 6. 渡辺富栄（2010）「大東文化大学大学院の通訳プログラム」（――通訳専門職教育15年の挑戦――））『通訳翻訳研究』日本通訳翻訳学会誌．第10号231-241項.
- 7. 染谷泰正、川原清志、山本成代（2013）.「英語教育における意義と位置づけ」『TILTシンポジウム』学会誌．第5号73-78項.
- 8.Cummins.J. (1991b). Language development and academic learning. In L. M. Malav & G. Duquette (Eds,) *Language, culture and cognition*. Clevedon England: Multilingual Matters.
- 9.Б. Хишигдэлгэр (2015). *Гадаад хэлний сургалтын арга, онол ба хэрэглээ*. х. 5-45. УБ

28

• **Abstract**. In this paper I shall argue that it is the time to give an attention to TILT (Translation in Language Teaching). My main argument for reassessing the role of translation in language teaching is that translation is basically a meta-linguistic task since it is a process that necessarily requires on to go beyond the linguistic level of understanding and communication. Therefore translation is one of the most effective ways of nurturing language learner's meta-linguistic awareness. Moreover, I suggested translation is the cognitive tool for learning the language control, which is the most important cognitive skill needed to be acquired for any language learning process. According to this conclusion I insist that the TILT study is the one of important issue for the promotion of Japanese language and education study in Mongolia and there is ample scope of study.

29